

# 通塾経験と有能感に関する一考察

— 注目賞賛欲求に着目して —

○松田有紀

(愛媛大学大学院教育学研究科)

## 目的

中学生の6割が通ったことがある学習塾について、宮下(1994)は、学習塾への通塾経験は、通塾開始の時期がやや遅ければ(13歳以降)、青年のアイデンティティ発達にプラスに働くと述べている。青年期の始まりに通塾を開始する動機としては個人の成績の序列や受験等が挙げられることが多く、それらは学力や学歴に関する自己評価や他者評価、他者からの賞賛と関連があると考えられる。

自分の位置が肯定できるものとなるのかそうでないのかには、自己評価に加え、他者評価もその基準となり、他者からの賞賛は、自己評価に影響を与え得る。有能感と関連する自己評価や他者評価の概念としては、自尊感情、注目賞賛欲求、仮想的有能感が挙げられる。自尊感情は自分自身に対する自己評価であり、注目賞賛欲求は自らの有能感を高めるために必要な、他者からみた自己評価であり、どちらも自分自身に対するものである。仮想的有能感は、自分に対する評価を保つために行われる他者軽視という、自己から見た他者評価の一つであり、他者に対するものである。これらの3つの概念は、学校という場において自分の学力をどう評価するかという点から、通塾動機と結びつきやすいと考えられる。

そこで、中学校3年生を対象に自尊感情と仮想的有能感、注目賞賛欲求が通塾経験とどのような関連があるかを統計的に調査することを目的とする。

仮説1 注目賞賛欲求と仮想的有能感には正の相関関係がある。

仮説2 通塾経験がある方が、注目賞賛欲求が高い。

仮説3 自尊感情が低く、仮想的有能感が高い仮定型は通塾期間が短い。

仮説4 注目賞賛欲求が低く仮想的有能感が高い群は学習塾に通わない。

## 方法

Rosenbergの自尊感情尺度日本語版(10項目)、速水他(2004)による仮想的有能感尺度(11項目)、小塩(1998)による自己愛人格目録短縮版(NPI-S)注目賞賛欲求下位尺度(10項目)を使用し、通塾の件数とそれぞれの通塾期間をたずねた。愛媛県内の公立中学校3年生334名に質問紙調査を行い、299名を分析の対象とした。

## 結果

自尊感情と注目賞賛欲求と仮想的有能感の相関関係の分析の結果、自尊感情と注目賞賛欲求( $r=.227$ ,  $p<.001$ )、仮想的有能感と注目賞賛欲求( $r=.176$ ,  $p<.001$ )にごく弱い正の相関が見られた。

通塾経験の有無と自尊感情、注目賞賛欲求、仮想

的有能感の尺度得点との間に関連があるかどうかを調べるために、通塾経験のある群とない群に分けてt検定を行ったところ、通塾経験のある群の方が注目賞賛欲求の尺度得点が有意に高かった( $t(183.177)=2.011$ ,  $p<.05$ )。

注目賞賛欲求と仮想的有能感にごく弱い相関がみられたことと、通塾経験のある群は注目賞賛欲求が有意に高い傾向が見られたことから、仮説4 注目賞賛欲求が低く、仮想的有能感が高い群は学習塾に通わない、を生成した。そこで注目賞賛欲求の尺度得点および仮想的有能感の尺度得点のそれぞれの平均値を基準に、高群と低群に分け、4つのグループに分類し、それぞれの通塾件数の平均との関連を分析するために分散分析を行った結果、4つのグループ間で5%水準の有意差が認められた。仮想的有能感が高く、注目賞賛欲求が低いグループは、仮想的有能感が高く、注目賞賛欲求も高いグループに比べ通塾件数が有意に少ないことが明らかになった。

## 考察

自尊感情尺度得点が低く、仮想的有能感が高い仮定型は、自尊心が低いので、学習塾に通っている場合、学習塾なしで受験を突破するには不安が大きすぎるともえられ、従って、受験に対する不安が通塾を継続させると考えられる。

注目賞賛欲求が低いということは、他者からみた自己評価をあまり必要としていないということであり、それは、他者からの評価を気にしないし、よく思われようとも思っていないということである。それはつまり、学校での評価も気にしないし、成績の序列も気にしないということにもつながる。また、仮想的有能感の高い群の対人関係について、速水(2011)は、「仮想的有能感の高い群は当初からより負の対人感情を持ちやすいが、時間経過とともにさらに負の対人感情を高める」と述べていることから、学区と重なることも多い学習塾では、学校の対人関係がそのまま持ち込まれる可能性があるため、学習塾に通うことでさらに負の対人感情を高める可能性があるのでは、学習塾という私的な場に通わないのではないかと考えられる。